

## 理念に就いての歴史的と非歴史的

ロバート、シンチンゲル

### II

扱て從來述べて來た倉卒な比較對照が、單なる形式的な類似を規定する以上の意味を有せんとならば、夫等凡てに含まれて居る問題が把握されなければならない。しかもいかなる問題把握も一面的であり、*Perspektivisch* であり、且つ歴史的豫想に満ちて居ることを知るならば、以下述ぶる所に存する不充分なる點も、或は寛恕せられ得るであらう。

今再び認識の問題を包括的に考へるならば、認識を認識でない何等かのものと定義する認識の解釋即或は之を現象界の征服と考へ、或は其單純化或は其有用化と解する如きは、悉く除外されなければならない。もし苟も認識があるならば、それは先

づ認識でなければならぬ。もしまたかりに認識が遂に不可能であると分るにしても、かやうな試を最後迄遂行することは、一つの天才的冒險事業であり、少くとも人間精神の不名譽を齎す結果とはなるまい。

然らば認識とは一般に如何に定義せらるべきであるか。單なる模寫では用をなさぬ。何者模寫は我々が模寫し得るが爲に豫め既に知つてゐなければならなかつたものを、再び與ふるに過ぎないからである。そこで原始的に無反省に體驗された現實在の充實した有りの儘の雜多性に或種の變化が起ると見なければならぬ。もし此變化が或るものは之を取上げ確保するが、他のものはそうしないと云ふやうなものであるならば之に依つて一種の *Übersichtlichkeit* が得られやうが、それは只眞實の認識 (*wirkliche Erkenntnis*) の根據として價値を有するに過ぎない。夫故に知識の領域を擴大し、之に *Übersichtlichkeit* を與へることは、常に認識の最初の課務であらう。但しこれには、一つには發見のため、また二つには撰擇と整序とのために、ある種の方位點 (*Richt- und Anhaltspunkt*) が與へられるとのこと、換言すれば知識の擴大と意識されたものの整序とは體系的でなければならぬとのこと、が豫想として必要である。扱てかやうな原理が見出され、我等の知識が出来るだけ擴大され、また整序されたとして、我

々は果して何時眞實の認識に到達したと云ひ得るのであるか。それは云ふ迄もなく、一聯の概念が根源的に意識された現實在 (die ursprünglich bewusste Wirklichkeit) を照明して、之以上には如何なる方向に向つても發問尋求することが出來ないと云ふに至つた時である。この全く形式的な命題から、既に凡ての認識の有する無限性が見られるのである。かやうな概念聯關は、果してそれが可能であるか否かは此場合別問題ではあるが、何よりも先づ原始的に意識された現實在を表現し、實在の體系とも名くべきものを、個々に又全體に渡つて規定するであらう。根底また目的と尋求して、遂に最終の無根柢者、無目的者に迄導き行かれなければならない。此現實在領域内に於ける凡ての可能的、並に現實的關係は、もろもろの運動方向の意義及その本質的意味と同様に、規定されたものとならなければならないであらう。最終の認識の理想は、云はゞ、世界を一創造主の精神に表象されたものと考へねばならぬと云ふやうな種類のものとなるのではないか。此比喩は哲學史に於て我々が常に遭逢するものであり、マールブランシュに於ては全く特殊の意義を有するものである。

以上述ぶる所に依つて、何等内容的のものが得られた譯ではない。何者、概念が如何なる方法で現實在を規定するかは尙依然として決定されてゐないからである。

しかし、概念が現實在を表現すること、且つ其實在の關係をば、悉く概念中に取入れられるやうに現示しなければならぬことを確立することが、既に重大なる意義あることである。尙またかの知識擴大及整序の原理も、此最終の概念的規定の中に入込まなければならぬ。何者、此原理の應用の權利は、出來上つた認識に於て初めて證し得る所であるからである。夫故に之等の原理は、最終の概念聯關に於て、其方向をば、意義に満ちた、現實在の規定に對して必然的なものとして證しなければならぬであらう。同様に之等の原理はまた最終の概念聯關に於ける必然的思惟方向並に體系的統一となり、且又現實在其者の統一要素を包含するであらう。之等の原理は知識擴大並に整序の原理たる性質上、一つの *Übergriffen* を必要とする。これは檢證を経て正しとせられるものである——否更に深く云へば、事實上統一機能を發揮することに依つて正しとせられるのである。即先づ第一に、之等の原理は未だ知られないものを知られたものとし、未だ秩序付けられないものを秩序付けられたものとして豫想する。又第二には、有限の經驗をば無限に延長し、且つそこに於て終結したものと考へ、整序に取つて必要な、本質的なものと非本質的なものとの區別を可能ならしめる。第三に、之等の原理は條件の全部、即根柢なき目的なき無條件者を眞實に

現はさなければならぬ——もしそれが經驗の系列を豫め完成するものであつて、自ら其系列の内に墮するものでなく、却つて之を可能ならしめ、其根柢に横はらねばならないとするならば。——第四には、此根柢付くる要素は、知識擴大に於ける、主觀的豫料と、概念聯關に於ける(客觀的條件全部、即原始的に意識されたものに於ける、本質的なもの)の概念による整序と、現實在の體系、其の者に於ける最終の秩序の兩者を意味する。

以上述ぶる所に依つて、我々は理念の根柢に存する問題に近づいたと思ふ。理念とは——ヘーゲルの言葉を借れば——概念と客觀性との統一 (die Einheit des Begriffs und der Objektivität) 即眞理である。夫故に現實在と認識に於ける其映像との一致に眞理があるのではない。理念の判斷に依つて仲介された、現實在と概念との一致が眞理なのである。

之によつて云ひ現はさるゝ所は、思惟と存在との一致ではなく、考へられたもの、そして只理念に於て考へられたもの、従つて根柢に横へられた者と存在との一致である。夫故に、人は早くから理念の思惟に對して、認識機能の等級別に於て、最高の段階を指定したのであつた。殊に最高にして最終なる根柢付けに於て然りである。こ

れは恐らく只蓋然的に羅列し得るものではあるまい。理性の特有な能作として企圖せられるものであり、其把握に伴ふ Evidenz が、やがて最終の辯明の或種の保證をなすものである。最終の眞理に於ける此飛躍は唐突且つ無聯絡ではあるが、其後退は連續的のもので、有ゆる現實在の聯關から瞭々として現はれ來らねばならない。何者 Grundlegungen の客觀性は、それが現實在の規定に役立ち得るところにあるからである。或は寧ろ、このことが其客觀性の Kriterium であり、客觀性其者は現實在の Funktion bestimmt-sein を意味して居るのであらう。理念の働は、此夫自身規定されたものを概念的に規定されたものとして現はすところにある。之即ち認識一般の可能性である。

マイルブランシュがアーノルドとの論議に於て、感覺をば對象の存在の自然的啓示と考へ、理念をば感覺と同時的のもの——但し初は云はゞ只遠くから見られて居るに過ぎない——と説明しなければならなくなつたのは、偶々哲學的思辨に於ては、初め原理と切離したものを、後に至つて相結合するとの不可能なる事實を示すものである。所謂「感覺の混沌界」は一つの抽象的產物で、質料と形式との間に打勝ち難い罅隙を打開くものである。我々が住む此世界、我々が自己自身の状態と同様に無反省に

意識しつゝある此世界は、認識方程式の「 $x$ 」であり、認識の對象である。自然、自然認識乃至其範疇は、自ら只其一斷面に外ならぬ。斷面や次元は凡べて理念によつて規定せられる。恰も個々の次元の内部に於て、連續性が理念によつて、其進展と並に聯關に於て、確保されるやうに。最後には之等の理念の聯結及實在一般の連續性が、理性の逃避するとの出來ない最も急迫した問題である。今や認識が模寫であり得ないことが再び極めて明瞭となつた。理念の聯結、世界の連續性、どうして之を「模寫する」ことが出來やう。しかし其本質を表現する概念に於て之を把握することは、これ實に充分意義あることではないか。さはいへ、此場合「假定」が眞實の根柢付けとして證せられなければならない。即それは同一の現實在が、或時は或る風に、他の時は、そうでなく規定されることを許さないものでなければならぬ。尤も諸次元の間の衝突は、恐らく我々に取つてはいつ迄も解き得ないかもしれない。がそれは別問題である、結局我々の認識は我々のものであり、従つて Perspektivisch のものでなければならぬ。理念の主觀的要素と客觀的要素との統一の中に此 Perspektivität が認識の本質的要素として現はれてゐる。これは意識の影であつて、人は之を越えることが出來ない。之即認識をば「客觀的」―古い字義に於ける―となつた現實在から區別する所の當の

ものである。夫故に、我々の認識の眞理は *Perspektivisch* のものであるが、夫故にこそそはまた眞理なのである。眞理とは正しく思惟と存在との抽象的同一ではない。(況んや存在と其映像との同一では固よりない)實にそは思惟によつて仲介された現實在夫自身の綜合的、自己同一である。認識に於ける認識に相應はしきものは、思惟が自ら發見することではなくて、現實在が思惟に於て明となることであり、此爲には「*Deutlichmachung*」(或は寧ろ「*Deutung*」)の凡ての次元が協働しなければならぬのである。(完、岡野留次郎譯)

〔譯者附記〕 シンチンゲル氏は目下大阪高等學校獨逸語教師として奉職せられつゝある、將來多くの望を囑すべき若き僑敏である。氏はフライブルヒに生れ、一九一九年の春より、先づ當時伯林にありしカツシラー教授の下に學び、續いてフライブルヒのフツサルー、又マールブルヒのナトルプ、ハルトマン等に就き、再び當時ハンブルヒの正教授となつて居たカツシラーの下に歸り、此處に於て其博士論文 *Philosophische Grundfragen bei Malebranche und Arnaud, Idee* を提出して學位を得た。それが一九二二年である。其翌年ハイデルベルヒのリツケルトの許にあつて主として歴史哲學に關する問題を論究する中、其夏日本に來るこゝになり爾來大阪高等學校に於て教鞭を取る傍、哲學研究に専心せられつゝある。此度譯者の請を容れて其論稿を哲學研究に寄せられた厚意に對し、譯者は深く感謝を表する次第である。譯者は屢々氏を煩はして不徹底の點を正し、只管原文に忠實ならむことを期したのであるが、或は意外の誤がないとも保し難い。同氏の原文に興味を有せらるゝ方には特に氏に請うて原文を清覽に供しても差支あるまいかと思ふ。